

佐藤雅晴

尾行

Masaharu Sato
Trace

存在の不在／不在の存在

大分県出身の作家・佐藤雅晴さんの
展覧会「佐藤雅晴尾行―存在の不在／
不在の存在」が開催されます。2019
年に惜しまれながら亡くなった佐藤
さんの作品や展覧会について、佐藤
さんと親交があり、本展の企画・構
成にも携わっている、東京・新宿の
ギャラリー「KENNAKASHI」
の中橋健一さんにお話を伺いました。



「ガイコツ」Acrylic on board, 72.7x60.6cm, 2018年、個人蔵



「福島尾行」展示風景（撮影・大島成己）



ギャラリー
KENNAKASHI
中橋健一さん

— 中橋さんからみて、佐藤さん
はどんな作家でしょうか？

佐藤さんはビデオカメラで撮影し
た日常の風景を、パソコン上でトレ
ースしてアニメーション化する「ロトス
コープ」と呼ばれる表現を用いた作
品で知られる作家です。個人的なつ
ながりをお話すると、佐藤さんと
の出会いが2015年。アーティスト
の海老原靖さんが、当時私のギャラ
リーで開催していた自身の個展に連
れてきてくれたのがきっかけです。
それからは他のアーティストも交え
て食事をしたり、佐藤さんの『東京
尾行』という作品のワンシーンを私
の部屋で撮影したりという交流が
ありました。

初めてお会いした時から佐藤さん
はガンの闘病中でした。大変なこと
もたくさんあったと思うのですが、
大きな声でよく笑う人でした。仕
事で一緒にしたのは18年から19年
のことです。私のギャラリーで『死神先
生』という佐藤さんの個展を開催し
ました。佐藤さんは会期中に亡くな
り、これが生前最後の個展になりま
した。

作家は不在でも、作品を通していつでも向き合える

— 作品にはどんな印象がありま
すか？

どの作品にも感じるのには、視線の
面影です。人、飛んでいるガラス、
花、とかげ、どんな細かいものを描
写した作品でも、佐藤さんがじっ
と見ている視線を感じます。

ロトスコープという表現では、撮影
した対象をアニメーション化するの
に膨大な時間を必要とします。3
分の映像を作品化するのに6カ月か
かることもあるそうです。映像をパ
ソコンに取り込み、アニメーション化
するために長い時間をかけて見続
ける。その視線が作品に宿っている
のだと思います。

ただ、見るという行為で佐藤さん
と対象はつながっていますが、絶対
に同一化しない「ずれ」があります。
それを佐藤さんの作品や、今回の展
覧会のタイトルにもある「尾行」とい
う言葉が象徴しています。

— 中橋さんが特に印象に残って
いる作品はありますか？

どれも印象的なものばかりです
が、あえて挙げるなら『死神先生』の
個展で展示をした作品です。

展示したのは佐藤さんが18年9月
に余命3カ月と宣告を受けてから、
集中して描き上げた絵画作品。展
覧会の準備期間中、抗がん剤の投与
を中止した佐藤さんは日に日に体



「Calling(ドイツ編)」アニメーション、ループ(7分)、シングルチャンネルビデオ、2009-2010年、個人蔵



「東京尾行」アニメーション、ループ、12チャンネルビデオ、自動演奏ピアノ、2015-2016年、個人蔵

調が悪くなっていきました。一方、
私は毎日とても元気。そんな中で、
佐藤さんの作品が訴えかけてくる
空間をつくることは途方もない作業
に感じました。

そこで、ギャラリーに2泊3日で泊
まり込んでみることにしました。夜
はイスを並べたものをベッド代わ
りにして、体がきちんと伸びない状
態で眠りました。体に負荷をかけな
がら、寝ている時も作品とともに
過ごすことで、作品のことがこれま
で以上に理解できました。そうして
作品の配置が決まっていたんです。
ただじつと時間をかけて向き合うこ
との意味の大きさを思い知らされ
ましたね。

『死神先生』では、これまでの映像
作品とは違い、絵画作品を展示し
ました。ただ、映像なのか絵画なのか
という分類や、制作に費やされる時
間の違いはありますが、どちらであ
っても、人や風景、生き物の肖像を「描
いている」感覚なのだと思います。

佐藤さんの映像作品は数分の短い
ものが多いですが、どれもループ映
像になっています。はじまりも終わ
りもなく、鑑賞する人が作品の前
に立った時から関係がはじまる。そ
れは絵画とも似ていると感じます。

— 5月15日からは『佐藤雅晴
尾行―存在の不在／不在の存在』
がはじまります。どんな展覧会に
なりそうですか？

佐藤さんが生まれた大分の土地
で、作品はすべてが勢ぞろいする大
回顧展になります。「尾行」は佐藤さ
んの作品に通底するテーマです。今
回の展覧会を訪れる人たちが、展覧会
やカタログとして形に残そうとして
いる私たち関係者も、佐藤さんを
「尾行」しているのだと言えます。そ
のイメージをタイトルにしました。
それぞれの人が住んでいる街から
大分に来て、展覧会を見て、自分の
街に戻っていく。そして展覧会を思
い出しながらカタログを開くたび
に、また尾行がはじまる。ループ映
像のように、終わることなく続いて
いきます。

それは実はすべてに言えることで
す。私たちは新型コロナウイルス以
前と以後、東日本大震災の前後、人
の生死などで線引きをしますが、本
当はそんな線引きはないまま、すべ
てのことは続いていくんですよね。こ
れは佐藤さんの作品の大きなテーマ
でもあります。

だから作家の存在は不在でも、作
品を通していつでも向き合えるのだ
と思います。展覧会をじっくり見て
いただければ、きっと佐藤さんと対
話したような気持ちになれるはず
です。そして展覧会を見終えたあ
と、また静かに思いつくような時間
があるとうれしいですね。

DATA

佐藤雅晴 尾行 存在の不在／不在の存在

5/15(土)～6/27(日)

▶大分県立美術館
1階 展示室A

10:00～19:00、金・土曜～20:00 ※入場は閉館の30分前まで 一般 800(600)円、大学・高校生 500(300)円 ※中学生以下は無料 ※()内は前売りおよび有料入場20名以上の団体料金 ※大分県芸術文化友の会 びびKOTOBUKI無料(同伴者1名半額)、TAKASAGO無料、UME団体料金 ※障がい者手帳等をご提示の方とその付添者(1名)は無料 大分県立美術館 Tel:097-533-4500

【展覧会概要】佐藤雅晴は、1973年大分県白杵市の生まれ。日常風景をビデオカメラで撮影した後、パソコン上でペンツールを用いて慎重にトレースする「ロトスコープ」技法でアニメーションや平面の作品を創作。佐藤の作品には、観る者に、現前に映る事物の存在感とともに、その逆にあたる不確かさや儚さなどを感じさせる独特の世界観があります。2009年には「第12回岡本太郎現代芸術賞」で特別賞を受賞。近年では、原美術館での個展「ハロドキュメント10 佐藤雅晴-東京尾行」(2016)のほか、シドニーとオーストラリアでも個展「TOKYO TRACE 2」(2017)を開催するなど、国内外で精力的に作品を発表し、高い評価を受けるなか、2019年、45歳の若さで惜しまれながら亡くなりました。本展では、代表作の《Calling》《東京尾行》《福島尾行》などの映像アニメーション作品をはじめ、フォトデジタルペインティングやアクリル画など、佐藤の活動の全貌を紹介します。実在の不確かさや存在の儚さなど、私たちがどこかで感じているものが作品に映し出されているからこそ、その対にある存在に希望や光輝く可能性があることを感じる。佐藤の作品の魅力はそこにはあります。ぜひ、会場でその作品の数々をご覧ください。